

文化伝承へのエネルギー

——『福音会沿革史料』誕生の背景——

久 富 節 子

要 旨

『福音会沿革史料』という7冊分の冊子史料が、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）の図書館にある。これは福音会の会員であった文倉平次郎（1868-1945）が、『福音会月報』などをもとにして、1936年頃にまとめたものであるが、その誕生の背景についてはわからない点が多かった。サンフランシスコでの Japanese-American History Archives での調査、関係者へのインタビュー、文倉の残した資料分析などの結果、『福音会沿革史料』が、サンフランシスコ在住の社会主義者、岡繁樹の協力によって生まれたことがわかった。文倉が史料をまとめ始めた後に、世界大戦とサンフランシスコ大地震という2つの大きな災害が起こり、文倉自身、すべての資料は灰燼に帰したものとあきらめていたが、35年近くたってから、それが岡繁樹のもとに存在することがわかったのである。

はじめに

『歴史湮滅の歎』⁽¹⁾は常に耳にする語である。されば如何にせば歴史の保全を全ふし得べきか、これ誠に至難の事業である。（中略）1906年4月18日、世にも恐ろしき桑港（筆者注：サンフランシスコのこと）大震災で米人社会の貴重なる記録も吾等日本人社会の文書も多くは灰燼となりしも、幸ひに吾が福音会に保管されし記録及び他の古き日本人団体最初の会報、もしくは機関雑誌などの或る物共に大震災の厄を逃れ、今日余の手中に保存されているのである。

この記事は、1936年、サンフランシスコで岡繁樹によって発行されていた『アメリカ新聞』からの抜粋である⁽²⁾。

私は感慨無量です。これ皆、すべて、小生が苦心して集めし古新聞や記録に違いありません。長い間頭より忘れられぬ荷物、それをただ、なんとなしに今日まで貴君が保管せられたのも奇跡です。あの荷物の中に私の魂が入っているのです。

これは、当時日本で咸臨丸の研究をしていた文倉平次郎が、岡繁樹に宛てた手紙からの抜粋である⁽³⁾。

『福音会沿革史料』という資料の原本が、サンフランシスコの Japanese-American History Archives に保管されている。これは、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）にあるものとは

ほぼ同じものであり、福音会の会員であった文倉平次郎（1868-1945）が、『福音会月報』などをもとにして、1936年頃にまとめたものである。文倉平次郎は、その著書『幕末軍艦咸臨丸』が、死後に司馬遼太郎から絶賛されたことから、最近では歴史関係の分野で少々知られるようになったが、生前はまったく無名の人物であった⁽⁴⁾

新井（1986）は『福音会沿革史料』の分析の必要性を説き、次のように述べている。

在米邦人の福音会活動史をその創立までさかのぼって跡づけ、歴史的な役割をみきわめ、その意義づけを行うことが、研究上要請されている。（中略）福音会の歴史の変遷をたどり、その実態を把握した上でないと、「福音会と日本人」の歴史的関係をおさえることができない（pp. 249-250）。

『福音会沿革史料』誕生までには、世界大戦とサンフランシスコ大地震という2つの大きな事件が災いして、文倉が集めた資料が自分の手に戻るまでに、35年近くの歳月を必要とした。UCLAにある史料をめぐっては、著者、筆跡、表紙に残る他人の「蔵書」というなぐり書きの理由、などについて不明な点が多かったが、今回、文献の分析や保存に関わった人へのインタビューなどから、新たな部分が判明した。

民族の対立、戦争など複雑で深刻な「異文化」の中で生活し、葛藤をくぐりぬけてきた者が、厳しい国際情勢の中にあっても、その貴重な史実を後世に残す価値があると判断した場合、その人はどのような行動をとるのだろうか。この論文では、まず「福音会」の活動を概観したうえで、『福音会沿革史料』を何とか後世に残そうと努力した文倉平次郎と岡繁樹という人物の努力の軌跡をマイクロ・エスノグラフィーの視点から考察する。

I. 福音会の存在意義

1. 福音会とは

福音会とは1877年から1915年くらいまでアメリカのサンフランシスコに存在した日本人のための組織で、当時渡米した青年たちの多くの者が、最初の数週間ここで過ごし、アメリカで生活するための基礎的な知識を得ていった。福音会の母体は、その名称からも想像できるとおりキリスト教であったが、そこでの活動は日常の生活全般に関わるものであった。全盛期の1880年代後期から1890年代には、その存在は、領事館と並ぶ日本の代表的機関であったといわれるほどで、留学生たちにおおきな影響を与えた。文倉が福音会で過ごした11年間は、ちょうどこの時期に重なる。1890年以降、福音会は教会から組織を分離させ、在米の日本人が自立できるようにと、多岐にわたる事業を発展させていった。文倉の手記「回顧75年」⁽⁵⁾は次のように述べている。

この頃に福音会が扱っていた事業には、次のようなものがあつた。

桂庵（仕事紹介業）の開始、英語や学校の改革、クリーニング業開始、レストランの開業、散髪屋、浴場の開始、日本語日刊新聞の発行、英文の印刷業、金融機関の開設、地方の開墾事業、鉄道農

園などへの人夫請負。(中略)

当時の福音会の会員数は70-100名で、この中から将来の日本を支える多くの人材が生まれ出た。ドクトル浅野三弥、のちの鹿島銀行支配人宮崎敬助、日活社長横田永之助、船成金中村精七郎、正金銀行員巽孝之丞、文学士瀬尾鍋吉、加州大学教授市橋倭、牧師笹尾鉄三郎、法学博士米田實、三井銀行重役米山梅吉など。おおくはスクールボーイで苦学した連中だ(文倉1943? : p. 138)。

2. 福音会の成立過程

明治初期のサンフランシスコでは、まだ日本人のコミュニティは存在せず、学生や水夫、浮浪者など、雑多な人たちが流れ着いていた。福音会が発足した明治10年頃になっても、ハワイの官約移民(153名)、会津若松コロニー(約40名)を除けば、日本人はほんの数名しか存在しなかった。その中に長野県出身の田中文蔵という男がいた。いろいろな事業を仕掛けては失敗する男で、何度も新しい住みかを探す生活を強いられていたが、ワシントン街の中国人教会の下層に「貸間」を見つけてそこに住み始めた。その頃の彼らの食生活といえば、中国人街で麺をかじり、水を飲んで飢えを凌ぐというものであったというから、おそらく中国人街は彼らにとってより馴染み深い場所だったのだろう。そのうちに中啓蔵という歯医者で働いていた男やその他の友達が、毎晩のように田中の所にやってきては話し込むようになった。彼らにとってこのような「たまり場」は、唯一の息抜き場であったようだ。

しばらくすると美山貫一⁽⁶⁾が彼らに加わって聖書研究を勧め、中国人ミッションの責任者であり、メソジスト監督教会の宣教師でもあるオーチス・ギブソン⁽⁷⁾が、彼らを日曜礼拝に招いたりするようになり、1877年10月6日「福音会」が結成された。「集会は毎週土曜の夜に行ない、聖書の講義と演説をする。会費は月25セント。役員は会長、会計、書記各一名。総会は年2回開くこと」などが会則として決められた。聖書講義はギブソンが受け持ち、その建物を寄宿舍として使うことで、日本人の生活の基礎が作れるようになったのである。

また、この頃になると、日本でも海外への移住を勧める論調が多くなった。文倉もその流れの中で留学へと心が動いていく。文倉は次のように述べている。

月刊雑誌『来たれ日本人』(後の『桑港新報』)の桑港便りというコラムには、米国へ来ればわずかの労働をして学問が出来るスクールボーイという働き口がある、と書いてある。また『時事新報』には、渡米した慶応義塾出の若者が商店を開いて成功しており、学資のないものにはスクールボーイの働き口もあるから渡米すべし、との記事を見たので、私の気持ちはますます動いたのである(文倉1943? : p. 127)。

当時アメリカを目指した人々のジャンルは、大きく分けて、出稼ぎ目的と留学目的のふたつに分けられる。出稼ぎ目的の者は賃金だけが目的だから都市にいる必要はなく、日本人労働者の一団として、カリフォルニアの内陸部、ユタ、コロラドまで、どんどん奥地へ入っていったが、留学生は勉強

が目的なので、大学や夜学校のある都市から離れられない。かれらは、サンフランシスコ、オークランド、などのベイ・エリアにとどまり、スクールボーイとして小遣いを稼ぎながら、勉学に励んだのである。

Ⅱ.『福音会沿革史料』誕生の背景

1. 福音会と文倉平次郎

文倉は、森孫右衛門（佃島、魚河岸の開祖）を先祖に持つ森家の出であるが、父親である森利三郎が早死にしたことから、親戚の背広職人、文倉の家に養子となる。当時の背広職人は政府の要人の洋服を作っており、高給取りであったので文倉は生活には困らなかったが、養父は勉学への理解はなかった。幼少時から非常に知的好奇心が強く、「勉強がしたい」子どもであった文倉は、そのことでずっと悩み続ける。おまけにいろいろな政治家をまじかに見て、たいしたことのない若ぞうの政治家が「洋行する」のが、うらやましくて仕方なかった。そんなある日、サンフランシスコには福音会という組織があり、「スクールボーイをしながら働けば留学が可能である」との情報を得て、文倉は家出を決意する。そして神田の英語の私塾に入塾して4ヶ月近く英語の勉強をした後、1888年渡米する。

3等中国人船室のひと隅に案内された。油臭さと、体臭と、部屋の薄暗さと不潔さで気持ち悪くなった。用意してきた仁丹を口にして室内を見回すと、自分一人と思ひしに、中国人の陰から20人ばかりの同胞が現れて名乗りを上げたので、おおいに力頼りになった。いまその中で記憶に残っている者は、米山梅吉、杉原彦太郎、馬場小三郎、青木富吉、内村悌三郎などである（文倉1943? : p. 130）

3週間後船は無事にサンフランシスコに到着した。

食堂で一同午餐を喫した後、応接室に休んで身の振り方を相談しあっていると、政治で日本を追われた「十九世紀」社の菅原傳や、「同舟会」の櫛引弓人、宗教団体では青年会、福音会の代表が訪れてきて、相談相手になってくれ、4、5名の同船者はそれに頼っていったが、残る十数人はその夜は旅館に一泊することにした。（中略）翌朝朝食後、福音会の代表者が来たので、米山、青木その他とともに、福音会に行くことにした（同上 p. 132）。

こうして文倉は福音会の一員となる。福音会は、ちょうど発展期にさしかかっており場所も中国人街から新しい所に移転したばかりであった。

ゼシー街は舗装もせざる板敷きの道路で、馬糞など散らされて、中国人街と大差なき三流程度の町であった。建物は木造二階建て住宅二軒で、家の横に日本人教会並びに福音会と英語でペンキ書きが

してある。階下を美以教会が使用して礼拝堂や学校とし、二階は福音会が使用して、寄宿舎を設けている（一泊十セント）。また、隣家の一軒は牧師美山貫一夫妻が住み、時々ハリス博士夫妻が泊まれる。その裏手には福音会の賄い所がある（朝昼食各十セント、夕食は肉がつくので十五セント）。もちろん安直な洋食であるが、時々日本料理も作る（同上 p. 131）。

1885年あたりから日本からの渡米者の数は大幅に増え、1890年までの5年間には年平均360人にのぼり、1890年の在米日本人は2000名を越えている。

2. 福音会の活動内容

『福音会沿革史料 三期の部（A） 自1892年1月 至1893年4月』から文倉が福音会で過ごした時期の会の活動を垣間見てみよう。なお、この史料が編纂される前のオリジナルの資料はガリ版印刷であったため、1936年に文倉がまとめた際には40年以上の年月の経過による資料の傷みがはげしく、「判読に困難なところが多く省略した箇所も多い。また姓名にも間違えがあるかもしれない」という断りの注を、冒頭に載せている。

〔演説、討論〕

福音会規則（1887年10月）にも、取締規則（1891年8月）にも毎週土曜日の例会では、まず聖書の講義があり、そのあとに演説、討論などを行っており、扱っているテーマの多様さは、宗教の枠をはるかに越えている。

1892年の1月の例会での演説会では、「刑罰権の基礎について」、「北海道の景観」、「商家に貴ぶべきは信用にあり」、「青年の方針」、「銀貨問題」などがあげられている。3月には、「相続論」、「偉大なる国民」、「内地移住と外地移住とは何れが先んずべき」、「フランスにおける相続法の沿革」、「日本の地勢」、「宇宙の法則」などの演題があがっている。

また、単なる討論だけではなく、デイベイトに近いものも見られる。12月3日には、「現今わが国において海運、陸運いずれが先に拡張すべきや」というテーマが論じられ、「海運優先論者」の「敗北」となっている。（文倉1936：三期の部（A） p. 50）

〔研究会〕

有志による自主的な研究会も盛んである。文倉は他の有志とともに「学術講演会を定期的に関いて、毎週水曜の午後8時から有志が専門の分野の話をすること」を提案している。ちなみに文倉は、この研究会では「欧米の偉人について」というテーマを受け持ち、その年（1892年）10月21日のコロンブスアメリカ大陸発見400年祝典の折には「コロンブス伝記」という題目で話をしている。

また、3月には毎週月火木金の4日、午後8時から、英語と数学の研究会を開いて、「実地の活用を主とする教授を始める」とある。（同上 p. 9）。有志による英語の演説の練習も始まっており、3月17日には「実地試験が行われて好評であった」との記述が見られる（同上 p. 9）。

〔付属夜学校〕

在米の日本人が、現地の商業学校、中学校に入りやすいように、また、英語の実地会話を養成するために、1892年7月11日にターク街307番地に夜学校が開設された。教師は欧米人2名、日本人3名で、開設後わずか2週間で50名以上の在籍者を数えている。なお、文倉はこの年、福音会では、この夜学校開設のための準備委員と月報委員の役割を任ぜられている。

〔寄宿舍〕

寄宿舍からは、「ダブルベッド17台、シングルベッド1台の施設に35名の者が入舎しており、満員である」との報告がある（同上 p. 14）。

これらの記述から、1890年代は確かに福音会の発展期であり、活気に満ちた空気が会全体にみなぎっていたであろうことが容易に想像できる。

3. 福音会の末期と岡繁樹

1900年代に入り、排日の暗雲は次第に濃くなっていった。文倉は妹が重病であることを知り、1901年帰国するが、それと入れ替わるようにサンフランシスコにやってきたのが岡繁樹である。

岡は1878年高知に生まれ、文倉とはまったく異なったタイプの社会主義者である。幸徳秋水、堺利彦、片山潜、荒畑寒村などと交流が深く、政府の弾圧にあうことも多かった。少年時代から喧嘩っ早くていろいろな問題を起こしてきたが、一方では非常に親分肌で面倒見がよく、金に困っている人には自分が借金してまでも融通するという豪快なところがあった。

そういう2人が、偶然のことから接点を持つことになる。文倉がサンフランシスコに残してきた資料の入った行李を30年後に岡が発見したのである。中を開けたところ、福音会の史料やその他の文献が、どっさりとでてきた。この論文の冒頭に掲げた文倉から岡への手紙文は、そのときのものである。

福音会はサンフランシスコ大地震の頃から急速に存在意義を失っていく。その一つの要因が、仏教会の魅力である。サンフランシスコには1898年に仏教青年会が設立されており、キリスト教も仏教も仲良く共存していたが、もともと日本人にとって仏教はキリスト教よりずっと親しみやすい。仏教会はその後着実に会員数を増やし、1912年にはキリスト教の教会員2040人に対して、仏教の教会員は5450人となっている（吉田1995： p. 59）。

1915年頃、岡は、ブッシュ街に住んでおり、福音会に部屋を貸していた。おそらくこの頃の福音会は、社会主義者のたまり場と化していたのであろう。福音会はこの後正式に解散し、文倉が在米時代に管理していた福音会の記録が、行李に入ったまま岡の家に残された。その頃サンフランシスコに在住していた日本人の中には突然出現した豊富な資料に狂喜して、資料をそのまま使って出版する者も出てきた。文倉は岡に懇願し、いくつかの約束をとりかわした上で、1935年岡が一時帰国した折にトランクは文倉の手に戻された。

御持参下されし福音会の記録類を見て、私は感激いたしました。この記録が貴君に保護され、それがまた私の手に届けられる。何かこれには天命ともいえるものがあって、小生に「福音会の歴史を残せ」との命が下りしものと信じます。(中略) いま、助手の筆耕家に手伝わせて写さしております。(中略) 行李に入れたままでは湿気でカビがはえるので時々日に干して居ります⁽⁸⁾。

文倉の娘にあたる吉村圭の話によると、文倉は2人の助手を雇って、毎日自宅の二階に閉じこもって作業を続けていたという。

岡は、戦争が終わってサンフランシスコに戻ると、再び印刷所と書籍店を経営し、『アメリカ新聞』という週刊誌を発行して、その紙面に『福音会の記録及び文書頒布趣意書』の記事を載せている。5ドルの年会費で会員を募り、「アメリカ新聞別冊」として会員に配布する、という、いかにも「事業家」岡らしい手法である。

文倉は『福音会沿革資料』を3セット作り、2セットを岡に送っている。UCLAにあるものはそのうちの一セットであると思われるが、岡から友人に貸し出された際に少々問題があったらしく、第三者の手が入った痕跡が残されている。

Ⅲ. マイクロ・エスノグラフィーによる文化の研究

アブールゴッド (Abu-Lughod, 1991) は、ローカルな場で展開している個々の事例にこだわったマイクロ・エスノグラフィー (ethnographies of the particular) を書くことを提唱している。「長期間のプロセスや、ローカルなものを越えた効果は、ローカルに特定化された場にしかあらわれない (箕浦1999)」という理由からである。このことを本論文に適用すれば、サンフランシスコという特定な場で、19世紀末から20世紀という特定の時代に存在した福音会という組織の個々の活動を詳細に記述することによって、ローカルな事象を超えた普遍的な事象、すなわち、現代の日本にも、他の国にも存在する留学を切望する若者たちとそれを支える組織が浮き彫りにされてくる。また、文倉と岡が、データに基づいた客観的な史料という形で自分たちの異文化体験を後世に伝えて残しておこうと、時代の荒波に揉まれながらも初心を貫徹したその姿を描くことによって、「文化を伝える」という行為の意義、およびその背景にある戦争という行為のむごさがあぶりだされてくるのである。どんな時代にあっても私たちはローカルで個別的な生を生きることしか出来ない。そしてそれを描くことによって、マクロな次元で起こっていることが透かして見えてくる。マイクロな視座は必ずマクロの視座との関連性をもっているのである。

「文化」と呼ばれるものの背後には、その時代の背景となる要素、国情、政情などが複雑に絡み合っている。2003年3月20日以来、私たちはイラクでの戦争を、まるでスペクタクル観戦でもあるかのように茶の間でテレビを通して眺めていた。そしてその後、多くの人が懸念したとおり、各地で泥沼化した局地紛争が起こっている。我々人類は40年前のベトナム戦争はおろか、文倉や岡が生きていた時代と大して変わらない愚行を繰り返すことしかできないのだろうか。事実と真実、実像と虚像、

生と死が、生身なのかおもしろいのかも判断がつきにくいという、危うくも不思議な現代に生きている私たちには、「多文化主義」、「多民族共存」という理想に燃えた言葉さえ、時に空虚に鳴り響く。

「文化」とは、毎日の「現実」の繰り返しからあぶりだされ、生成されていくものであると私は考える。自分が確かにそこで生活し、そこで繰り返してきた「文化」が、戦争や、地震という一人の人間の手には負えない事実によって消し去られようとするとき、その人は立ち上がり、何とかそれを守り抜き、次の世代に継承しようという行動をとるのであろう。文倉と岡が自分たちの生きた「文化」の継承に努力したように、私たちが「今ある現実」を「一つの時代の文化」として後世の人に残し、その評価を仰がなくてはならないのかもしれない。

注

- (1) 鷲頭文三（尺魔）（慶応元年生まれ、1894年渡米）が、1922年4月から7月まで97回にわたって『日米新聞』に連載したコラム。UCLA 図書館所蔵。（Oka Papers, JARP Collection No. 2010, Box 134; Japanese American Research Project Collection）

本論文の引用は、サンフランシスコの Japanese — American History Archives 館長、岡省三氏の個人所有物からのものである。岡省三氏に感謝の意を捧げる。

- (2) 岡繁樹が1915年頃から1917年まではロサンゼルスで、1936年頃にはサンフランシスコで出していた週刊新聞。

- (3) 文倉から岡への書簡。1933年8月13日付。

- (4) オリジナルの『幕末軍艦咸臨丸』は1938年刊。1993年中央文庫から（上）（下）2冊で復刻された。司馬遼太郎は1969年2月号の『図書』で、次のように述べている。

昭和13年刊、791頁で、踏まえられている資料の洪さ、精細さは驚嘆すべきものがあり、記述は堅牢で、40年間の努力の集成という悲壮さをすこしも感じさせないほどに終始科学的な冷静さを保っている。私は幕末の海軍関係を知ろうとおもい、一時期、書かれたものをあさったことがあるが、幕府関係の艦船を知ろうとするについてはこの書物を読む以外に方法がないということがわかった。これほど精緻ないわば原典にちかい名著が、専門家でもなんでもない人によって書かれたということについて、人間の情熱というもののふしぎさを、書棚でこの本の背表紙を見るたびに考えこまされる（文倉1969 p. 490）

- (5) おそらく1943年頃に書かれた文倉の個人史。個人所有。

- (6) 美山貫一は、萩の出身であるが、当時の開港場の長崎で学んだことから、海外文化にふれる機会も多く、1874年単身アメリカに渡った。そして1885年から86年にかけて日本に一時帰国した折に、銀座に東京福音会を開設した。この東京福音会は後に竹川町に移り、1890年まで英語教育夜学校として活発な活動を繰り広げた。文倉がアメリカへの留学を決意するのも、この東京福音会との出会いであった。

- (7) ギブソンは長い間中国で伝道しており、漢書を読み、中国人排斥の盛んな時にも、徹底して彼らの味方となるような人であったという。漂流日本人が街に現れ始めると教会の下層に寝泊りさせたり、英語がわからなくて困っている者に英語を教えたりする誠実な人であったので、彼の人柄を慕って教会にやってくる日本人も増えてきた。もちろん、当時のキリスト教の伝道は、「マニフェスト・デステニー」の旗印のもとでアメリカの威信を保つことが至上の「善」であったわけであるから、伝道の背後には、温情主義的な世界観があったことは否めないが、ギブソンの誠実な人柄は、異国で心細い思いをしている中国人、日本人にとっては頼りがいのある存在だったのであろう。

- (8) 文倉から岡への書簡、1935年11月17日付。

- (9) 『アメリカ新聞』の1938年2月26日、4月9日、1939年3月18日日付の新聞にその記事が見られる。拙論文の冒頭に掲げた引用文は、その一部である。

参考文献

- Abu-Lughod (1991). "Writing against culture". In R. G. Fox (Ed.), *Recapturing anthropology: Working in the present*. Santa Fe: School of American Research Press.
- 新井勝紘 (1986), 「自由民権期の渡米邦人活動史 (序)」『米国初期の日本語新聞』 勁草書房 pp. 233-250.
- Oka, Shigeki (1936). In 『アメリカ新聞』 San Francisco, California, USA.
- 岡繁樹 (1948), 『井伊大老』 プロGRESSIVE ニュース社 San Francisco, California, USA.
- 岡直樹 (1994), 「祖国を敵として」『長谷川テル作品集』日本平和大系17日本図書センター.
- 紀田順一郎 (1982), 「一念を貫いたライフワーク」『生涯を賭けた一冊』新潮社 pp. 7-32.
- 銀座教会百年史編纂委員会編 (1994), 『銀座教会百年史』 日本基督教団銀座教会.
- 在米日本人会 (1940), 『在米日本人史』 San Francisco, California, USA.
- 司馬遼太郎「ある情熱」(1969), 『図書』 岩波書房. 文倉 (1993) に収載.
- 文倉平次郎 (1993), 『幕末軍艦咸臨丸』上, 下巻 中央公論社.
- 文倉平次郎 (1936), 『福音会沿革史料』 UCLA Special Collections BL87 A1713 University Research Library Box 951575.
- 文倉平次郎 (1943(?)), 「回顧75年」未刊, 私蔵.
- 箕浦康子 (1999), 『フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィ入門』.
- 吉田 亮 (1995), 『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』 日本図書センター.